
鏡像

石ころ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鏡像

【Nコード】

N3248B

【作者名】

石ころ

【あらすじ】

似つかない「ぼく」と水島。けれども一緒にいる二人。ある夜、二人が不良に絡まれて……。

「よう」

水島がいつものようにラフな挨拶をしてきた。

「ああ」

ぼくはいつものように面倒そうな挨拶をした。

「毎度のこと、つれない野郎だな」

水島が苦笑を浮かべながらぼくに言った。

「そうか」

ぼくはただそれだけを返した。

そのとおりだと自分でも理解している。おそらく、クラスの全員がそんな感情をぼくに抱いているだろう。それを気にしてはいないが。

教室内で誰かが騒ぐ。それに乗じて、誰かが爆笑をする。斜向かいの席で女子数人がたむろして、雑談をしている。「あいつ、むかつくよね」「部活の先輩にチョーカッコイイ人が……」「最近、授業むずくない？」静寂が訪れることはない。絶えずどこかで誰かが会話し、音を立てる。

ああ、うるさい——そう思うことはある。しかしだからといって、彼らを蔑むことはしない。自然なことだからだ、とても。学校とはそういうものだろう。勉強に励み、そして友と笑い合って、人間関係を築く。このホームルーム前の時間は、自由な時間だ。行き過ぎなければ、彼らのすることに文句は言えまい。

「それでよ、俺は言ったんだ」

だがしかし、だ。

「どっちの口で俺の……」

「うるさい黙れ」

ぼくは眼前のクズに蔑みと怒りの視線を送った。こういった馬鹿は例外だ。

「なんだ？ お前こういう話は好きだろ」

「勝手に決めるな、歩く猥褻物が」

「ああっ？ 誰がだつて？」

「刑法一七四条に違犯しているお前だ」

そう言おうとしたとき、ちょうどHR開始の合図のチャイムが鳴った。「ふん、運のいい野郎だ……」とよくわからないことを言いながら去る水島を蔑し、^{なみ}ぼくは教室に入ってきた担任がHRを終わらすのを、ただ待つことにした。

四限目が終わり、昼食と休憩の時間となった。授業から解放されて、皆は伸び伸びとしている。ぼくが教科書を机にしまっていると「購買に行こうぜ」

と、いつものように水島はぼくの隣に来た。

「ああ」

と、いつものようにぼくは水島にそう答えた。

ぼくら二人とも、弁当を学校に持参しない。そのためいつも二人で昼食を買いに行く。が、別にぼくは一人でも構わないのだ。ただ彼がぼくを誘うだけだ。ぼくも断る理由がないので、ただ誘いに乗るだけだ。

なぜぼくなのか？ —— 簡単だ、他に誘う人間がいないのだ。クラス（ぼくを含め）全員が、水島に対してある認識を抱いている。あいつは危険だ、と。

「早くしろ」

水島がぼくをせかす。ぼくは鞆からサイフを取り出すと、立ち上がった。

水島が歩き出す。ぼくは黙って彼について行く。水島がぼくにとりのための話を振る。ぼくは当たり前障りのない返事をする。

「あれ」ぼくたち二人が購買に着いた時だった。水島が誰かを見つけて声をかけた。「望月じゃないか」

ぼくはその生徒を見た。どうやら二年生のようだ。迷惑そうな顔をしているのは、やはり相手がこいつだからだろう。

「どうも」

望月と呼ばれた二年生は、軽く頭を下げてにべもなく挨拶をした。

「よう、元気か？」

と、水島は気さくに話しかけているが、こいつの性格からしてその二年生が友人であるわけがない。

水島はにやにやと笑いを浮かべると、

「いやあ、それにしても——あのときはどうも」

ああ、とぼくは思い出した。いつだったか、水島にとある生徒が絡まれて、殴り合いの喧嘩となった。水島が一方的に因縁をつけたらしい。その喧嘩により、水島は停学となった。まあ厳密には、喧嘩自体は停学の絶対的な原因ではなかったのだが。ちなみに、そのことがあつてからクラスの皆が彼を避けるようになったのは言うまでもない。

と、そこで二年生と目が合った。彼が怪訝な表情を見ると、水島もそれにつられてこちらを見る。

「おっと、いけねえ」

水島はそれから一言二言の会話をすると、二年生と別れてこちらに戻ってきた。

「すまん」

「……いや」

ふと、どうしてこんなやつとつるんでいるんだろうという疑問が沸いて出た。こんな危ない野郎といてなにか利益があるのか？ 一人で居る方が静かでないんじゃないのか？

いつからだろうか、こうして二人でいることが多くなったのは。知らぬうちに、なぜかぼくらは一緒にいるのが普通となっていた。

「おい、さつさとお前も買えよ」

「……ああ」

ぼくは思考をやめた。考えるだけ無駄というような気がしてきた

からだった。

外は驚くほど暗かった。顔を上げて、光り輝く星や月はどこにも見当たらない。一天を覆う雲のためだ。ぼくは気を付けながら歩き始めた。この貧乏学校の外灯は、あつてないような弱々しい光しか出さず、足元すらはつきりと視認できない。

「……………」

闇は嫌い、ではない。冷たい風とともに、頭を冴えさしてくれる。歩きながら、ぼくは先程まで学校で勉強していた内容を思い返す。

「お前は勉強以外にすることないのかよ」

ふと、そんな水島の言葉が脳裏によぎる。

「他にすることがないからな」

確か、そう答えた気がする。愛想のないぼくは、一緒になつて遊ぶ友人などいない。テレビゲームやパソコンというようなものも、ほとんどしない。結局、それしかなくなるというわけだ。それにもう三年生なのだから、これぐらいは普通だとぼくは思う。

大通りから路地裏に出ると、さらにあたりは暗くなった。首都に近いくせに、ここらはまだ近代化とはほど遠い。

周りには、静寂と冷たい夜風ばかりだ。これが一生続いたらどんなに良いか、そんな考えがよぎった。

「よう、金だしな」

不快なだみ声に、ぼくは眉根を寄せた。

発声源を見ると、長身で体つきのよい男がにやにやと笑っている。歳はぼくと同じくらいか。その顔は、絶好の力モを見つけたとばかりに、余裕で満ちていた。なるほど、これが不良というやつか。天然記念物だ。

眼だけを動かして周囲を確認しても、人影はない。

さて、どうしたものか。水島でもあるまいし、殴り合いはありえない。素直にサイフを差し出す気は毛頭ない。されどこの人通りの

ない道で、助けを求めて果たして意味はあるのか。逆上されてもたまらない。

「……わかりました」

とりあえず、そう返事をした。それから鞆を探る。手になにかが触れた。これは筆箱か。ぼくは鞆の中で筆箱を開いてから、あるものを取り出した。

それをかつあげ男の顔へと振るう。男が飛び下がる。ステンレスの刃が男の鼻先をかすめた。

「——！？」

一步踏み込み、その顔に向けて突きを放つ。身をよじり、首を反らして避けられた。

初撃を逃したのは痛かった。さすがに喧嘩慣れをしているか。二撃目は冷静に対応された。

たたらを踏んだばくに、強烈な蹴りがやってきた。体格差に加えて、身体を鍛えていないぼくは、あっさりと地に転ばされた。

「てめえ！」

追撃の蹴りがわき腹にくる。転倒の衝撃で身体が動かない。なす術もなくそれを喰らった。大丈夫、耐えられないほどじゃない。

再びの追撃の直前、ぼくは右手に握る小型のハサミを動かした。わき腹近くへ。振るわれた足が止まる。さすがに刃物が先にあると躊躇するものだ。

それを好機とし、男から離れるように転がる。素早く立ち上がり、ハサミを前に突き出す。威嚇だ。

男と対峙する。相手は動かない。エモノのあるこちらに、迂闊に手を出せないということだ。

「刑法三六条——正当防衛というものを知ってるか？」

「……クソが」

男はつばを吐き捨てると、ぼくに背を向けて歩き出した。こちらを気にする様子は見当たらない。まあ、向こうもぼくがわざわざ攻撃を仕掛けるとは思っていないのだろう。

蹴られた箇所が痛む。あざになっているかもしれない。

「……くそッ」

久しぶりにぼくは悪罵を吐いた。

「よう」

ぼくは驚き、手にしていた鉛筆を落としてしまった。いつもの挨拶とは違い、暗い声だったのだ。

「どうした？」

反射的に、そう返してしまった。言うてから、まずいことをしたと苦い顔をする。

水島は床に転がり落ちた鉛筆を拾い、それをぼくの胸ポケットに押し込むと、そのままぼくの肩を掴み、

「なあ、聞いてくれよ」

予想通りそうきた。明らかに迷惑な顔をしているぼくを意に介さず、水島はまくしたてる。徐々に声を荒らげ、ついにはぼくの机を強く叩くほどだ。まったく迷惑極まりない。

「ようするに、フラれたってことだろ？」

「俺の悲劇をそんな簡単に言うんじゃない！」

ばん、とまた机を叩く。さすがのぼくも、本気でいらいらしてきた。ただでさえ昨日の怪我が痛むというのに。

水島がまたなにかを言おうとしたとき、ようやく待ちに待ったチャイムが鳴った。「ふん、運のいい野郎だッ」とわけのわからないことを言いながら去る水島を蔑し、ぼくは嘆息しながら、教室に入ってきた担任がHRを終わらすのを、ただ待つことにした。

「おせえ！」

放課後、水島にとある場所に呼び出されてやってきたぼくは、絶句した。なんだこのありえない光景は？　ぼくは目をつむった。――

―数秒経ち、ぼくはまぶたを上げた。さつきと同じ光景だ。

「……これは幻というやつか」

「ああ？　なに言ってるんだ？」

赤みを帯びた顔で水島がぼくを睨む。それから彼は、手にしている缶の中身を飲むと、息をついた。その缶はどう見ても、

「ビール、だよな……」

頭が痛くなるのを感じた。いくら校舎と倉庫で囲まれた、外からほとんど見えないこの場所であっても、学校内で飲酒をする高校生がどこにいる。……いや、ここにいるか。

ぼくは溜息をついた。

「未成年者飲酒禁止法って知ってるか？」

「なんだそりゃ」

それだけで一蹴し、水島は足元に置いてあるビール袋から缶ビールを取り出すと、「飲め」とぼくに差し出した。

「……………」

「にゃあ」

足元から間抜けっぽい鳴き声がした。見ると、白猫が一匹。この学校に住み着いている野良猫だ。しつぽが太く、ふさふさしているのが特徴である。

ぼくがノーリアクションを保っていると、水島はいきなり缶ビールを持つ手を下げて、「じゃあお前飲むか」とその猫に差し出した。こいつは真正のアホか。

「……動物愛護団体に訴えられてもしらないぞ」

「なんだそりゃ」

水島が缶ビールをさらに近づけると、猫は不快そうな表情を浮かべ、くるりと回れ右をしてどこかへ去っていった。それを一瞥し、「チッ」と舌打ちをすると、水島はビール袋からまた別のものを取り出してぼくに手渡した。

ジュース——と思ったが、よくよく見ると果実酒だ。

「飲め。まあビールよりか飲みやすいだろ？」

「……あのなあ」

とは言いつつも、ぼくは缶のフタを開けた。

「……………」

味に興味があるのも事実だ。年齢も年齢なので、害はほとんどないだろう。それにまあ、ここに来るような人間はまずいないだろうし。

缶のフタを開けると、リンゴの匂いが鼻をついた。一口ふくむ。

舌触りは炭酸のようだ。味は——苦味のあるジュース。アルコール飲料という感じはしない。

「なかなかいけるだろ？」

にやりと水島が笑う。そして次のことを言った。

「じゃ、俺の話を聞いてもらおうか」

それからぼくは、一時間近くにわたり水島の愚痴を聞かされるはめになった。

「……やっぱりお前は酒癖が悪い」

「んなこたねえよ」

「酒に酔って喧嘩をして、停学になった人間がなにを言う」

「ああ？ あれはなあ……………」

闇夜をぼくたち二人は歩いていた。冷たい風がほおをなでる。しかし残念ながら、今回は静寂の出番はないだろう。ぼくは深呼吸を一度した。頭は澄み切っている。酔ってはいないだろう、多分。

「それでよお……………」

水島が愚痴り毒づく。ぼくはただぼんやりと宙を見る。

「そう思うよな？」

水島がぼくに訊いてくる。そもそも聞いていないぼくは、ただ首だけを縦に振る。

「なあ、聞いているか？」

「ああ」

ぼくは適当に言う。

「おいコラ」

だから聞いていると言ってるだろう？——と言おうとしたところで、声が違ふことに気づいた。

相手を見据える前に、ぼくは蹴りを喰らって地面に転んでいた。

「——ああ！？　なんだてめえら！」

水島がぼくを蹴った男に掴みかかるうとし——殴り飛ばされた。男の両隣にいる子分らしき二人の仕業だ。

真ん中のリーダー格らしき男は、もちろん昨日のかつあげ男だ。今度は巾着を腰に下げての登場か。しかしこんなところで再び遭遇するとは、ぼくもつくづく運が悪い。

水島が起き上がり、再び三人に食ってかかる。背の低い一人がこぶしを振るう。水島はそれをかわし、逆に殴りこんだ。

だが、多勢に無勢だ。もう一人の子分が横から殴りかかる。例のかつあげ男も加わり、すぐに形勢は変わった。一方的に水島がやられている。

「おっと、危ないもんは出すなよ」

こちらの行動を見逃さず、かつあげ男がぼくへと照準を移した。腹を蹴られ、掴んでいた筆箱とバッグを遠くへ放り投げられた。まだだ。すぐさま立ち上がり、ぼくは力いっぱい手を握り、男に向かった。

こぶしはあっさりと受け止められ、逆に強烈なボディブローを喰らった。たまらずぼくは膝をついた。勉強だけでなく、身体も鍛えていた方がよかったかな、と剣呑な状況ながらも、そんなことを思った。

「昨日の勢いはどうしたんだ？」

嘲るように男は笑う。その直後、呻き声を聞き、ぼくは水島を向いた。ダウンした彼に、二人がやりたい放題をしている。特に、水島に殴られたやつのはひどいものだ。顔を真っ赤にして、力の限り足蹴を加えている。

——なんで水島がこんな目にあっているんだ？　これはぼくだけの問題のはずなのに。心中で、彼に対するすまない気持ちと、そしてもう一つのものが湧き上がった。

なにか、とてつもなくどす黒い感情だ。怒りを越えたものだった。どうしてぼくたちはこんなゴミにこんなことをされなければならぬい？　いや、冷静になろう——そんな気持ちは少しもなかった。どうにかして、これを晴らしたい。この感情をすべて——

そのとき、胸に違和感を覚えた。ぼくにはすぐにその正体がわかった。——ああ、これを使えばいいんじゃないか。自然と口がゆがむ。

いつの間にか、ぼくは動いていた。どうやってかは、わからない。自分でも信じられないほどの敏捷さで、嘲笑を浮かべている男の懷に移動していた。

男の顔が、驚愕へと変わる。後ろに退こうとするが、遅すぎる。

鉛筆から指へと不快な感触が伝わるようだった。ぼくは男に嘲笑をやってみせた。

「あああああッ！」

耳障りな叫び声に、ぼくはいらついた。黙れクズ。

子分二人が驚き、どうしたのかと男に近寄る。そして事態に気づいたのか、さつきまで真っ赤だった顔が、急に真っ青になる。リトマス紙みたいなヤツだ。ぼくはユカイで笑った。

「……………る」

怨恨に溢れた、這うような声が聞こえた。その方向を向くと、鬼相をした水島がいた。二人から解放された彼は、ポケットからなにかを取り出した。

「……………てやる」

殺してやる、と言ったのかもしれない。

次の刹那、銀光が現れた。それは刃の形をしていた。ステンレスのハサミなんかとまるで違う鋭さを持っている。アーミーナイフだ、それもかなり大型の。

二人がますます青くなる。かつあげ男はそもそも錯乱してうずくまっていた。

水島が一步踏み出す。弾かれたように、二人はかつあげ男をつれて逃げ出した。

「……………」

水島は、追わなかった。

「……………」

ぼくは、けがれた鉛筆を投げ捨てると、無言で立ち上がった。

「……………」

水島は、アーミーナイフをポケットにしまうと、無言で歩き出した。

ぼくもそれに続く。

ふと空を見上げると、昨日とは打って変わって星空だった。満天の星を眺めながらぼくは、やはりここは田舎だな、と思った。

「……………」 すまん

ぼくは長い沈黙を破って、謝った。水島は首だけをこちらに向けて、にやりとやる。

「あいつ、失明したんじゃないか？」

「……………」 さあな。よく見てない」

ぼくは肩をすくめた。水島は表情を苦笑へと変えると、

「ったく、あぶねえ野郎だな、てめえは」

「……………」 ナイフを持ち歩いてるお前には言われたくない」

なにがツボにはまったのか、いきなり水島は爆笑しだした。狂ったように、ケラケラと。——そして、一緒に笑っているぼく自身に気づいた。

やっとぼくは理解した。そうか、類は友を呼ぶというやつだ。

ぼくとこいつは似たもの同士なんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3248b/>

鏡像

2010年10月8日15時10分発行